

2013年12月9日 発売

週刊現代で特集されました!

独占取材



「へそ」からの内視鏡手術で傷跡を残さない手術を開発

出世、権力、保身 ——
医療の世界には、心狂わす数多くのしがらみが存在する。
欲望にとらわれず、アウトローに生きる一人の男。
彼が遂げた、医師の本懐とは。

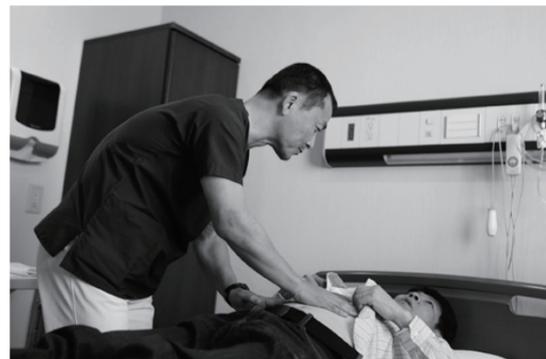
メディカルトピア草加病院
院長 金平 永二 外科医師

Kanehira Eiji

かねひら・えいじ / 60年、京都府生まれ、福井県育ち。'85年、金沢大学医学部卒。同大学および関連病院外科勤務を経て、ドイツ留学。最先端の内視鏡外科手術を学び、帰国後の'02年、日本初のフリーランス外科医に。'05年から四谷メディカルキューブ、'08年から上尾中央総合病院勤務を経て、'12年よりメディカルトピア草加病院院長



生徒を相手に朝から晩まで熱血指導。月1回、内視鏡外科のエキスパートを育てるべく開講している私塾「アミーサ道場」は、半年前には定員が埋まる



←手術前の説明と診察。患者は歩いて手術室に入り、アロマと音楽に癒されつつ手術に臨む

世界を股にかけた「フリー外科医」の矜持

フリーの外科医と言えは「ブラック・ジャック」、最近ではテレビドラマ『ドクターX』を思い浮かべる人も多いだろう。これらの物語では、主人公は難易度の高い手術を、1000万円以上の高額な報酬で引き受ける。金平医師の場合はどうだったのだろうか。

「依頼されるのは難しい手術ばかり。とにかく内視鏡手術を広めたかったので、報酬は先方の

一匹狼が自らの手でつかんだ「理想の医療」

『言い値』で請けました。だからでしょう。日に3件やって16700円という時がありましたね」

驚きの激安価格。それでも地道に手術を続けた結果、傷痕をほとんど残さない金平式内視鏡手術の評判は、まずは医師の間に広がり、やがて一般にも広く知られるようになった。「流し」の時代、国内外の60を超える病院を回り、年間140以上の症例を手掛けた。また、評判は海外にまで広まり、ニュージーランド、シンガポール、香港、韓国などからも執刀依頼が来るようになる。

フリーになって3年後、四谷メディカルキューブに「きずの小さな手術センター」センター長として迎えらる。その後、

評判を聞いた上尾中央医科グループから、「内視鏡手術を行う理想の病院をつくってみたいか」と声がかかり、12年、隅々にまで理想を追求した病院「メディカルトピア草加」を創設した。

また、月に一度私塾を開講。そこで、3人の生徒に対して一日中、内視鏡手術の知識と技術、そして哲学を教え込む。

「自分のポリシーや技術の細かいつとを、思う存分教える日があってもいいんじゃないかな」と思っています。骨太の土台のがっちりした外科医が育つことを願っています」

組織の枠に収まらず、流浪を続けた「日本初のフリー外科医」。自らの理想の病院を実現したことで、ようやく落ち着ける場所を見つけたのかもしれない。



↑メディカルトピア草加病院の1泊5万円の特別室。内装は、すべて金平医師がこだわり抜いて選んだもの

カメラ小僧から 心臓外科医志望へ

「すごい……」

手術を見学していた若手医師が呟いた。

胆石が次々とでき、激痛を伴う「胆のう腺筋腫症」に侵された胆のうを、全摘出する「単孔式内視鏡手術」。単孔とは、たった一つの穴という意味で、へそを縦に2・5cm切開して穴を開け、金平永二医師が開発した「エックスゲート」を挿入して行う、傷痕が残らない手術だ。

出血を見たのはメスを入れ、穴を拡張・固定するエックスゲートを装着した一瞬だけ。体への負担が極端に少ないからか、モニターに写った内臓はツヤツヤと輝き、生命感に満ちている。見事な手際で胆のうを摘出した後、創口はキュキュツと引き締めて縫合され、手術はわずか40分で終了した。

依頼が来れば、どんなに難しい症例でも駆けつけ、患者の命を救う——。数年前まで、病院に所属せず日本各地を飛び回る「日本初のフリーランス外科医」だった金平医師。彼の名を世界に知らしめたのは、胃と食道のつなぎ目にできたGIST(間質性腫瘍)という悪性腫瘍の単孔式内視鏡手術だ。



モニターに映し出された内臓を見ながら手術を行う。病巣を切り取る電気メスは、切ると同時に止血を行える為出血もほとんどない



へそに装着する「エックスゲート」。上部の穴から器具を挿入する。2年半の実験と改良を重ね、完成した。

2つとも金平医師が開発した、腹腔内で自由自在に動かせる手術鉗子(左)と、手術補助用の「BJニードル」

‘11年には、内視鏡外科の発展に貢献した医師に贈られる、名誉ある「大上賞」を受賞

その穴から直接胃に装着し、そこから内視鏡や鉗子などの器具を挿入して、胃を内部から手術してしまう。

「胃の内側から病巣を切除するので、がんに侵されていない健康な組織を傷つけないで済む。だから、臓器を残すことができるのです。胃があるのとならないのは、その後の人生がまるで違う。私はできるだけ残すよう全力を尽くしています」

09年にこの「金平式手術」を始めて以来、患者の数は増え続け、術式も全国で急速に広まりつつある。だが、フリーという道を選んだように、金平医師の半生は波乱に富んでいる。

「小さい頃はガキ大将でした。負けず嫌いで、仲間がやられたら倍返し(笑)」

そんな少年時代の彼が夢中になったのは、故郷・福井県の豊かな自然だった。カブトムシを何百匹獲ったかを自慢し合うような毎日の中で、いつしか「ネイチャーフォトグラフィアーになりたい」という夢を持つ。

「高校生の時、校則をやぶってバイトに明け暮れ、お金を貯めて一眼レフカメラを購入しました。信州の山へ通い詰めて写真を撮り、ネイチャーフォトの先駆者である田淵行男氏に弟子入りさせてほしいと手紙まで書いたこともありませう」

しかし、そんな夢に周囲は猛反対。必死に抵抗したが、進路

患者への罪悪感で 大学病院を飛び出す

懸命に修業に打ち込んだが、途中で方向転換してしまう。きっかけは、アルバイトで手伝った、ある関連病院での胃全摘手術の光景だった。

「執刀医から、『金平君見てーらん、腹の中は小宇宙のようだろう』と言われ、覗き込んだら、心を奪われてしまった。臓器はあまりに美しく、生命力に満ちていたのです。その瞬間、俺は消化器外科医になるんだ!と決意しました」

周囲のひんしゆくを買いつつも消化器科に移ったが、3年後、今度は「普通じゃない外科医を目指したい」とドイツ留学を希望。金沢大の担当教授から「どうしても行きたいのなら、辞めてから行け」と突き放され、辞表を書いて渡した。

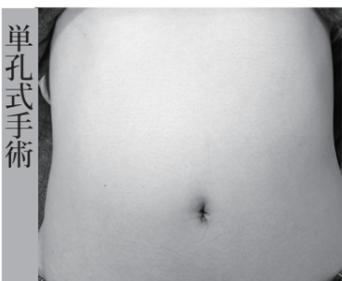
迎えてくれたのは内視鏡手術の先駆者・ゲルハルト・ブエス

指導の生物教師の一言で、人生が大きく変わった。

「生物が好きなら医者を目指せ。カメラマンは後でなっても遅くない。顕微鏡で見る細胞の世界は美しいぞ」

人体の神秘に魅せられた金平医師は、金沢大学医学部に入学。最初に目指したのは、心臓外科医だった。

「心臓を選んだのは、ただただ所属していたスキー部の顧問の先生が心臓外科医で、尊敬していたからです(笑)」



単孔式手術



従来の腹腔鏡手術

左 / 従来の腹腔鏡手術でも傷跡は4~6カ所残る。右 / 単孔式内視鏡手術。元から穴であるへそを切開するため、傷跡はほぼわからない。「へそが縦長になり、術前よりカタチがよくなった」と喜ばれることも少なくない

医師だった。手術を見学させてもらい、強い衝撃を受けた。

「手術室は薄暗く、全員が患者さんのお腹ではなく、モニターを見ている。すごく不思議な世界だと思いました」

あの頃、日本には「内視鏡外科」という言葉すらなく、僕自身、学んでも役に立つかどうか半信半疑で留学しました。でも手術を目の当たりにして、期待は一気に高まった。それからはのめりこんで、毎日手術を見るのが楽しかった。寝る時も『早く明日にならないかな』と子どもみたいに思っていました」

わずか1年半だったが、ブエス教授との間には堅い絆が結ばれ、教授は彼を「大切な友」と呼んでくれた。

そして、教授直伝のTEM(経肛門内視鏡下手術)と呼ばれる手術法は、金平式の単孔式内視鏡手術のベースとなった。

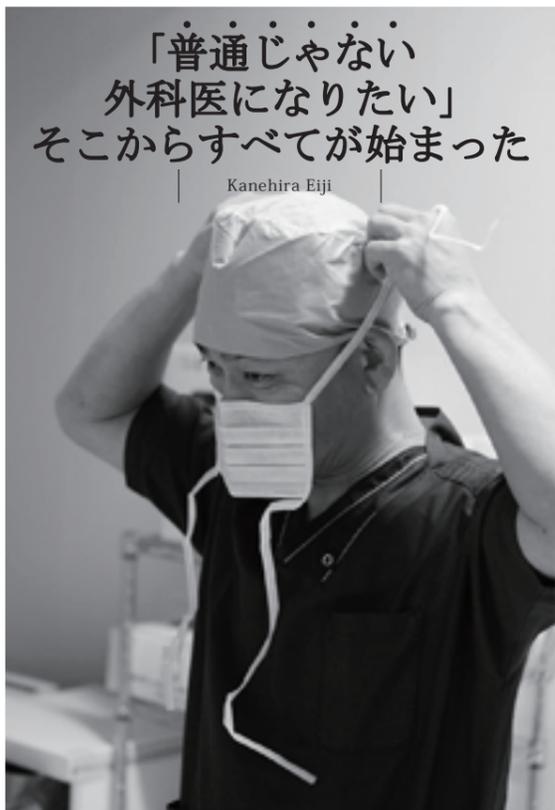
92年、海外修業を終えた彼は金沢大病院に復帰する。しかし、内視鏡への信用は薄く、腕を磨く機会は限られていた。難しい症例を手掛けさせてもらえない大学病院では、ドイツでの成果を活かせない。仕方なく関連病院に患者を転院させ、そこで内視鏡手術を展開したが、じきに教授の知るところとなり、内視鏡手術は禁じられてしまう。

「あの頃は辛かったですね。内視鏡を使って、体に負担をかけずに治すことができるのに、腹



出血は一瞬。 体内で手術すれば 辛さはグッと軽くなる

へその穴に装着された「エックスゲート」。3本の極細手術器具を体内に入れて操作する「単孔式内視鏡手術」を円滑に行うため、金平医師が独自開発した



「普通じゃない 外科医になりたい」 そこからすべてが始まった

Kanehira Eiji

を切られている患者さんがいると思うと申し訳なくて……」

罪悪感に耐え切れなくなった彼は、大学病院を辞め、「フリーランスの外科医」という前代未聞の道を選択する。ホームページを作り、ネット経由で依頼を受け、出張手術を請け負った。「最初はなかなか依頼が来なかつたので、食いつばぐれるかと心配しました。そこで、実際の手術を写真入りで細かくレポートしたり、患者さんの声を紹介するコンテンツをつくったり、内視鏡外科学会の重鎮に記事を書いてもらうなど工夫して、徐々に評判を上げていきました。やがて全国の患者さんから、『胃を全摘しないとだめだと言われたが、金平先生の技術で何とか残せないか』といった声がメールで届くようになりました」



内視鏡手術の練習をする、ドイツ留学時代の金平医師(右から2人目)。「ドイツ人の上司や同僚たちは、みんな親切にしてくれて、もにすごく人に恵まれていた」と振り返る